

# 京鹿子

平成三十年九月一日発行  
通巻一二九号 毎月一回二日発行

9月号

鈴 鹿 呂 仁

拾掬集 その三十六



学 び 舎 の 椅 子 の 低 さ よ 青 林 檜  
青 林 檜 地 球 ま だ ま だ 捨 て が た し  
水 打 つ て 招 き 入 れ た る 福 の 神  
夜 を 籠 め て 文 月 の 星 の ふ く ら み ぬ  
平 仮 名 を 崩 す 衣 擦 れ 夜 の 秋  
火 蛾 狂 ふ 平 に ご 容 赦 一 芝 居



空 つかむ爪の強か蟬の穴  
毛虫焼く身の程を知る知らぬ者  
磯 鷗の母恋ふ空や秋近し  
碁盤目の白動き出す朱夏の京  
夏 蝶のお忍び二頭涉成園  
烏丸通り薄暑の迂回お東さん  
いちまいの炎帝を据う御影堂  
反り橋の緩みだすあめんぼの空



— 近 詠 —

鈴鹿 仁

聖人の教へ

仏 心 は 禱 り の 容 かたち 白 木 槿

大 蟻 の め ざ す 法 門 錯 い ろ に

聖 人 の 教 へ 慕 ひ て 蟻 急 ぐ

— 追 懐 —

麻 の れ ん 金 と 黒 こく 充 つ 佛 具 店

炎 ゆ 朝 の ぶ つ き ら 棒 の 庭 箒



—近詠—

和田 照海

雲上ぐらし

峰 里 の 雲 上 ぐ ら し 男 梅 雨

敢 へ て 射 る い け ず の 草 矢 風 に 逸 る

産 土 の 隠 沼 祓 ひ 田 植 水

葭 切 や ひ と の 匂 ひ の 濁 川

梅 干 し て 母 の 生 き が ひ 藺 機 織 る



松本 鷹根



鬼百合

水無月の天の領域御陵晴

朝涼を雀と分かち庭を掃く

合歡咲きて旅の朝湯の陽に戦ぐ

かたつむり夢はなにいろ日照り雨

鬼百合と岬の風に刻解す

## 近 詠

蝶むすび

雲の峰藍より青き湖の膚

星今宵引けば解<sup>ほぐ</sup>るる蝶むすび

洗ひ髪に指からませつドラマ果つ

律川の旋律に揺れ鴨足草

声明や菩提樹の実を太らせて

塩貝 朱千

# 英華採集

今日の鬱ひだりに寄せて薔薇を剪る

鎌倉平佐和子

鬱という厄介なものを抱えていると人間にとつてはかなりのストレスとなる。人それぞれ大なり小なりの形で持ち合わせている鬱を作者は、左に寄せると言う。この左は恐らく左脳と解釈すれば合点がいく。右脳では作句に影響が出るだろう。下に結んだ「薔薇」は、美しいものを鑑賞し憂さを晴らすことに通じるとともに心の内に棘を芽生えさせないように剪るのである。作者独自の表現に俳味を感じる。

夏の浜母と言ふ字に水平線

福山北村 梢

幼い頃には、誰しも夏は海水浴へと両親に連れられて行った記憶があるに違いない。砂浜から沖へと水平線を眺めた時にその先に何があるのだろうか、果てしなき夢を育てたものだが、作者は甘えるように母に寄り添いながら夏の海を楽しんだのであろうか？母という字に水平線を見立てた背景を探ってみるのも又楽しいものである。

予報士の語尾は濁さず梅雨に入る

京都加藤 翅 英

最近の天気予報の精度は、宇宙観測システムのコンピュータ化が進み急速に上がってきている。週間予報から長期予報まで我々は日々の暮しに役立てているように予報士の解説も今ではかなり詳細にわたって的確に伝えているようだ。「語尾は濁さず」の措辞は言い得ており予報では、難しい梅雨入り宣言の形で季語を置いたところが良い。

# 神麓集

竹落葉 藤岡紫水

無韻てふ音生みてゆく竹落葉  
富士五湖の真上湧き立つ雲の峰  
どくだみの白が夕日を引き留める  
小面の微笑張り付く梅雨の壁  
もめごとは三家三様梅雨ながき

虫時雨 沼田巴字

境内の真昼の闇や萩白し  
紅萩はかるし白萩重かりし  
歌はずに地を這ふのみの秋の蟬  
曼珠沙華良寛ならば毬撞かむ  
一生は短きものよ虫時雨

赤き糸 丸井巴水

片虹の重さを量る長き橋  
クレパスの一色減らす夏の湖  
蝉声の耳鳴りつづく神の屋  
ひと枿を空け涼風の原因紙  
赤き糸弛まず夏の一日更け

柿の花 植村蘇星

深閑と子供の居ない子供の日  
連山の揺るる水面や早苗揺る  
博学にかたや雑学柿の花  
相応に持ち味生かす若葉風  
九合目次なる一手青嵐



# 神麓集

みどりの助走 北川 孝子

省略の過ぎたる暮し水を打つ  
水を打つ一心不乱といふ一語  
草矢打つこの身にあまる心意気  
青をもて描く闇あり明け易し  
大寺へみどりの助走ゆるやかに

著莪の花 直江 裕子

木洩れ日のしたたるところ著莪の花  
人恋ふに似てうすばかげろふの羽化  
新緑やまさかの時のノート書く  
はまぐりの青い灯もらす海いちまい  
母の日の母の素話アメジスト

新生姜 高木 晶子

焼きたたての鮎の一皿旅帰り  
花 檮 祭 の 後 の 真 骨 頂  
山門に入りしばらくは蝶の屋  
新生姜 月水金と予定あり  
梅雨雲の隙間を通るバイオリン

鳥 語 伊藤 希眸

歌舞伎開く木柝たぐの音ひびき汗退きぬ  
花道の奥の涼しさうら座敷  
虞美人草漱石ならばこそ尊し  
蒸し暑き部屋に転がる爺の髭  
庭草の茂るにまかす鳥語かな

# 神麓集

雲白き 奥田 筆子

雲白き木偏の電柱つばめ来る  
深梅雨や荷解きのやうに村消えて  
一輛にゆける列車は蛍籠  
四角ばった言葉ひびかず柿の花  
あぢさゐや変色しない夫とゐる

ストリートダンス 井上菜摘子

ストリートダンス五月のつむじ風  
新緑の奥へわたしに逢ひに行く  
アマリリスザ行にころぶ放送部  
喝采の引いてゆくなり薔薇の雨  
ひと泣きして星を涼しく鏝める

寂しづく 村田あを衣

街騒と南風の結び目晶子の碑  
利休訪ふ梅雨の傘より寂しづく  
いまむかし南風を乗せ来るルソン壺  
一の矢も二の矢も貴女草矢射る  
山あぢさゐ史実たどれば姫街道





# 京鹿子集

## 鈴鹿呂仁選

京田辺 山中志津子

浮舟の君の吐息や明易し  
草矢てふ読点若草ものがたり  
砂時計に合はず心音夏至夕べ  
まま母が魔女になる刻薔薇匂ふ  
カクテルに浮かぶかんばせ桜桃  
旅程閉つ鳩の浮巢を数へつつ  
京言葉添へてあなたへ草矢射る  
水音に添へばふる里桐の花  
蹠に溜まるストレス夏至の雨  
空白を埋む万緑をぬけて来て

京都 井尻 妙子

城陽 鷺山 珀眉

青芦の正面を切る片男波  
水脈の空へ空へと夏木立  
渾身のフルスイングや雲の峰  
深海の魚の進化図紙魚はしる  
ラメ入りの涼しき靴やピアノニスト  
夏空に余生にも似し昼の月  
ゆるやかに大河の曲り鷹アカシア  
野の風にあつまるところ姫女苑  
はまなすや淋しがり屋でジャズが好き  
コココーラとサザンが好きなままパバに

京都 片山 熙子

歌垣の遠つ淡海や花檮

福 山 亀井 福恵

名刹の仔細は知らず雨蛙

この先は御仏の道薄暑光

水無月やさらりと越ゆる大井川

囚はれの身は気賀にありほととぎす

草矢射る母みぬ故郷遠くなり

福 知 山 西村 滋子

人生は浮巢なりけり苦も楽も

太つ腹の寮母頼もし朴の花

奔放に血縁ひろく花十葉

新じやがの名をみて求む十勝産



良き便りとどく朝や燕の子

九十九折の道ゆくバスや合歓の花

予報士の語尾は濁さず梅雨に入る

この径の先はどんつき山藤垂る

玉虫の出自は知らず廃寺趾

青鷺のいつも横貌雲の果て

一服の田植肴や頬に風

ア リ ソ ナ 伊吹 之博

目をそらす即座に蟻の道急ぐ

得意気に花びら運ぶ蟻穴へ

千年の噴井を守るのれん風

紫陽花の色薄くして留守の家

酒 田 藤波 松山

万緑の中の瀬音や午後三時

薫風や神輿揺れ切る旧家前

炎天下土掘る人に家族あり

盲導犬主に添ひて初夏の駅

さいたま 神田 惣介

児等駅でユニセフ募金風光る

車窓には植田拡がり独り旅

ふらここや宙に笑顔の孫二人

青梅や酔ひが足りぬと酎を足す

戸 田 遠山 悟史

七変化喉の渴きにミルクテイー

泣きたくもめそめそせずに男梅雨

母の居ぬ庭一面の十葉や

鎌 倉 平佐 和子

福 山 北村 梢

ひとり居へ狐の提灯花ゆらす

夏の浜母と言ふ字に水平線

青梅のころがる先は就活生

ランナー等皇居一周薄暑光

平成の終わり近づき大噴水

今日の鬱ひだりに寄せて薔薇を剪る